

# 幼少期に中国と日本を移動した若者のアイデンティティ交渉

## －移動の過程における変化を中心に－

藤越（東京大学大学院生／お茶の水女子大学）

### 1. はじめに

グローバル化に伴い、幼少期より複数の国を移動しながら成長する若者が増加している。このように、トランスナショナルな移動を経験しながら成長した者については、教育、複言語能力、アイデンティティ、キャリア選択等、多くの視点からの研究がある。その中でも、アイデンティティについては、移動の過程で矛盾や葛藤をはらみ、変化し続けるものだとされ、多くの研究の焦点となっている（例: Kanno, 2003; 川上, 2021）。本研究では、移動の規模を考慮すると研究が十分でない、「中国に生まれ、幼少期に日本で数年間滞在した後中国に戻った若者」（以下、「幼少期に中国と日本を移動した若者」）を対象に、彼らのアイデンティティ交渉について分析する。特に、移動経験の各段階で、アイデンティティ交渉の実践にどのような変化があるのかを明らかにすることを目的とする。

### 2. 先行研究

Zhu (2017)によると、幼少期にトランスナショナルな移動を経験した若者のアイデンティティに関する研究の視点は、下記のような変化がみられる。従来、彼らのアイデンティティについては「複雑性」や「ハイブリッド性」等のように特徴づけられてきたが、この考え方は、アイデンティティが「国」や「地域」というカテゴリーに根差していることを前提としており、「一つの国の中でも多様なアイデンティティが存在する」という現代のモビリティを十分に説明できないと批判されている（Zhu, 2017: 118-119）。代わって現在では、移動にまつわるアイデンティティは、「存在する」ものではなく、会話や周囲とのかかわり等、様々なふるまいを通して、その時々実践されるもの、という、社会構築主義を軸とした捉え方が主流となっている（小林, 2021; Zhu, 2017）。本稿ではそのアイデンティティの実践を「アイデンティティ交渉」と称し、『自分自身が何者であるか』についての認識が、世界や他者との相互作用の中で流動的に変化したり、その認識を能動的に調整したりするプロセス」（参考: Norton, 2013; Weedon, 2004）と定義する。

先行研究では、幼少期に国を移動した若者のアイデンティティについて、主に、(1)個人のアイデンティティの変化に焦点を当て、ライフストーリーの形でその人の半生を描き出す方法（例: 川上, 2018）と、(2)当事者が参加する会話に焦点を当て、アイデンティティの実践を分析する方法（例: 小林, 2021）がある。(1)のタイプの研究は、一人の対象者の経時的な変化の解明に長けている一方、異なる事例間の比較が難しい。(2)のタイプの研究は、その時々ミクロなアイデンティティ実践のあり方を明らかにすることができるが、経時的な変化を捉えるためには長期間のデータ収集が必要となる。本研究では、複数の事例を対象に、移動の各過程での経時的な変化に着目するため、若者に対し、移動の経験を振り返るインタビューを行った。そのうえで、各段階でのアイデンティティ交渉について、インタビュー内容の切片化を通して抽象化する、オープン・コーディングの手法を採用した（詳細は3節）。

### 3. 研究方法及び研究協力者

本研究では、5名の「幼少期に中国と日本を移動した若者」への半構造化インタビューを通してデータを収集し、オープン・コーディング（佐藤, 2008; サトウ・春日・神崎, 2019）の手法を用いて分析した。半構造化インタビュー（2020年12月から2023年8月にかけてZOOMで実施、1名につき平均2.8時間）では、主に、移動の過程での経験や重要なイベント、影響を受けた人物、言語能力や言語への態度、成人後の国の移動、職業選択等について質問した。データ分析では、インタビューデータを文字化・切片化し、研究目的である「移動の過程でのアイデンティティ交渉の変化の解明」を鑑み、年齢ごとのアイデンティティ交渉の特徴に着目してラベル付けを行い、抽象化した。本研究の協力者5名のプロフィールを表1に示す。

表1 研究協力者のプロフィール（インタビュー時点）<sup>1</sup>

仮名	年齢	性別	日本滞在時の年齢（幼少期）	職業	現住地	成人後の国の移動経験（国：年齢）	インタビュー使用言語
トーマス	29	男	6-11	大学院生 <sup>1)</sup>	日本	アメリカ：19-27；日本：29-	中国語
ヤオ	32	女	7-13	ポスドク研究員	日本	日本：24-	日本語
ヒトエ	32	女	8-15	アーティスト（画家）	中国	アメリカ：24-28	日本語
キヨ	34	女	6-10	大学院生 <sup>1)</sup>	中国/日本 <sup>2)</sup>	日本：24-	中国語
シャンファ	33	女	2-12	会社員	日本	日本：20代後半-	日本語

1) 社会人経験あり 2) 日本の大学院に在籍しているがコロナ禍で中国に一時帰国中

## 4. 研究結果

分析の結果、幼少期に中国と日本を移動した若者のアイデンティティ交渉は、彼らの移動の過程において、以下、4.1 節から4.3 節に示す3つの特徴で変化していることが明らかになった<sup>2</sup>。

### 4.1 直線的で単純な方略から曲線的で複雑な方略への変化

幼少期に中国と日本を移動した若者は、幼少期には、自らが置かれた環境に同化する；自らや、自らの移動経験に好意的な友人・教師等に近づき、そうでない人とは距離を置く、といった、比較的単純なアイデンティティ交渉の方略を取ることが多い。例えば、幼少期の日本滞時に、中国語や中国に関するニュースに抵抗感を示したり〈キヨ〉、渡日直後に自身に親切にしてくれた教員のおかげで「日本大好きになった」り〈ヒトエ〉、中国への帰国直後に日本滞在経験に興味をもってくれたクラスメイトと仲良くなった結果、中国の学校に馴染んだり〈トーマス〉している。一方で、帰国後の中学校で日本製品不買運動に参加していたクラスメイトとは距離を取る〈ヒトエ〉等の方略を取った者がいる。

しかし、成長につれ、若者たちは、特に自身の移動経験に関してネガティブな働きかけがあった際、単に「距離を置く」以上の、曲線的で複雑な方略を取るようになる。例えば、シャンファは帰国後、中国の学校で歴史教育を受け、日本での経験と大きな違いがあったことに戸惑いを覚えた結果、インターネットを通して情報を調べ、自身で理解を深めている。

#### 【断片1 シャンファ 客観的な歴史への理解のための情報収集】

本当に（教科書に）書かれている情報が正しい情報なのかどうかっていうところを、疑いの目で客観的に、調べに行ったりしてましたね、インターネットとか使ったりして、やっぱ、自分で感じたことがやっぱりギャップが大きかったんで、「それって本当にそうなの」っていうのは、時間かけてちょっと調べたりはしてた気がします。

（調べてみてどうだった？）「南京大虐殺」みたいな言葉を、検索をして、そこで実際調べてみました。日本のネットの中でも、二通り意見が分かれる状況だったかな、って記憶があって、「実際に死んだんだよ」だったりとか、「それって現実の話ではないんだよ」みたいな人たちもいたので、「果たしてどうなの？」っていうところの結論が、当初は出なかった。かつ、「どっちが正しいか」っていうところも分からなかったんで、二面性があるというか、何事にも表と裏というか、「そういう意見もあるんだ、ふむふむ」っていうところで留まったかなと思います。

また、キヨは、成人後に再来日した際、「幼少期に滞在経験があるなら当然日本語ができるはず」とみなされ、日本語学習の努力を蔑ろにされ、幼少期の経験の開示に大きな抵抗感を持っていたことがある（膝, 2022）。その後、幼少期のトランスナショナルな移動について、専門的な知識を学ぶことができる大学院に進学した結果、自身の経験を開示することに抵抗感がなくなっただけでなく、より自身の経験を客観視できたという。

#### 【断片2 キヨ トランスナショナルな移動に関する専門知識を持つ仲間との出会い・経験の客観視】

今の大学院に進学してからは、「周りの人が前と違う」と思ったんです。年少時に日本で成長した子どもについて知っていて、例えば、能力や努力が過小評価される可能性とか、移動の過程での大変な経験とか。みんなで議論したときに、「あ、もう大丈夫なんだって、『私もそうだった』って言ってもいいんだ」って、やっと思えたんですね。

<sup>1</sup> 幼少期の日本滞在理由は5名共に両親の留学・研究である。また、5名共に滞時は日本の一校に通っていた。

<sup>2</sup> インタビューを引用する際は下記の記号を用いる：直接引用：「」；段落を引用：【断片番号 協力者仮名 ラベル名】、協力者名の表記：◇。インタビューで主に中国語を用いている場合、本稿で引用する断片は筆者の和訳によるものである。また個人情報保護の観点から、研究に影響のない範囲に限り、インタビューの内容を変更している箇所がある。

(大学院で自身も知識をつけて)幼少期の経験について、より客観的に見るできるようになりましたね。前は、客観視できていなくて、パニック状態だったんですけど、何っていうか、より遠くから自分が経験したことを見るできるようになったと思いますね。

#### 4.2 移動経験のある国への依存から、特定の国や移動経験に依らないアイデンティティ交渉への変化

幼少期に中国と日本を移動した若者は、幼少期には、日本滞在時は日本らしさ、中国帰国直後には中国らしさを追い求め、移動に関連する「国」に依存する形でアイデンティティ交渉をすることが多かった。一方、帰国直後以降から成人にかけて、次第に、「中国人」「日本人」といった、「国」を軸としたアイデンティティを周囲から当てはめられることや、移動経験や、移動によって得た複言語能力によってラベリングされることに抵抗や葛藤を示すようになる。例えば、トーマスは帰国後数年経って中学校の担任教師に移動経験を紹介された時、次のように抵抗を示している。

##### 【断片3 トーマス 教師による移動経験強調の拒否】

先生は、「(トーマスさんは幼少期に日本に住んでいたから)よく面倒見てあげてください」とかクラスメイトに言っていたんですけど、自分は「あ、先生、いいですいいです。自分全然問題ないんで、面倒とか見てもらわなくても大丈夫です」って、言っていましたね。

それと同時に、「国」や「トランスナショナルな移動経験」代わって、自身が持つ身体的特徴や趣味等を中心に、友人関係を築く事例が複数観察された。例えば、トーマスは自身が「体格が大きいこと」や「喧嘩が強いこと」でクラスメイトに「兄貴」と呼ばれ、ヒトエは自身と同じように「絵を描くのが好きな子」や「おしゃれを気にする子」と良好な関係を築き、中国での「生活も好きにな」って行ったという。

さらに、成人後、特にキャリアを意識したとき、トランスナショナルな移動が若者にもたらしたのは、単に言語能力や移動した国についての知識だけではなく、性格等の面でより抽象的に内面化されている。例えば、シャンファは現在日本で会社員として働いているが、現在の業務は中国とは特に関係がないそうである。それについて彼女は以下のように述べている。

##### 【断片4 シャンファ 移動によって得られた内面的な強みのキャリア上での発揮】

(中国と関係ない業務についたとき)最初の頃結構、若干残念かなって。「せっかく言語も、背景も分かるのに残念だな」と思っていたんですけども、でもそこから、要は「自分」というところを見つめ直した時に、「自分の強みって何なの」って、ただ単に日本と中国を繋ぐとかじゃなくて、自分の特性として「多様性のあるところ」だったりだとか、「バイタリティあるところ」って、そもそも中国で、中国人だということも一部関連してるんじゃないかなって思っているんで、「自分を最大限に発揮すればいいんじゃない？」っていう考えに変わってきてる感じですね。

#### 4.3 受け身的な方略から能動的で戦略的なアイデンティティ交渉への変化

幼少期に中国と日本を移動した若者は、幼少期には、外部からの働きかけを受けて、それに対応する形でアイデンティティ交渉をすることが多い。その後、幼少期の国の移動から時を重ねる過程で、より能動的かつ戦略的に、自身の移動経験や移動で得た資本を発展・活用しようとする。例えば、メディアを通して能動的に日本語能力を維持する、日本での滞在経験を友人関係やキャリア構築、子育てに活用する等、プラスの方向で能動的に移動経験を活用していることが多い。

一例として、ヒトエは、帰国直後を過ぎた高校入学後も、積極的に友人に日本での滞在経験を開示していたという。

##### 【断片5 ヒトエ 移動経験の開示を通じた友人関係の構築】

(日本にいたことを)なんかすごく、誇りに思ってた話しました。なんか、羨ましがられた、と思っています。なんか、そう、日本はやっぱ、あの、とにかくあの頃の私たちにとっては、日本とか韓国とか、中国よりおしゃれで可愛いじゃないですか。だから、「日本にいましたよ」ってことが、すごく、なんか、自慢できることだったんです。

また、トーマスは、日中戦争が授業の題材になったとき、日本滞在経験を逆手にとり、日本人役を買って出ることで、中国のクラスメイトに溶け込む道具として戦略的に使用していた。

#### 【断片6 トーマス 日本滞在経験を逆手にとっての中国人クラスメイトへの溶け込み】

例えば国語の授業で、日中戦争時代の中国兵と日本兵の衝突を扱ったテキストが出てくるんですよ。その時はなんか、ジロジロ見られたりもしますけど。でも、そういう時は自分から日本人役を買って出ていましたね。そう、手を挙げて、「先生、自分、日本人のセリフ読みますよ」って。で、笑いに変えていく、と。そしたらもうみんな何も言わなかったですね。別に、みんな自分が日本にいたことは知ってるので。あえて避けたりとかはしなかったです。クラスメイトも、それでいじめてくるとか、困らせてくるとかはなかったです。

このほかにも、キヨはインタビュー時、自身の子どもと一緒に国の移動を経験している最中であった。が、自身が移動を経験したからこそ、子どもが移動の過程で経験する様々な困難について、「より敏感になることができ、うまく対処できる」と述べている。

一方、日本における外国人、とりわけ中国人への差別や偏見を避けるという目的で、公共の場で日本語を選択して用いた経験がある者も複数いた。例えば、ヤオは以下のような経験をしており、シャンファも「中国人だってわかってサービスの質が落ちる」ことを避けるために、あえて日本語を使用していることがある、と語った。

#### 【断片7 ヤオ 中国人に向けられた敵意の回避のための日本語使用】

中国語喋ってたら、なんか、こう、ちょっと、なんかこう、変なおじさんに「しっしっ」(追い払う仕草)みたいなことをされたりとかしましたね。ご飯待ちしてて、中国の人と喋ってたら、日本語できないと思ったんでしょうね。「しっしっ」ってされたんですよ。中国人に対してのあれなのか、ただ単に中国嫌いなのか分かんないけど、その人に、「しっしっ」ってされて、で、「日本語分かります」って言ったら黙りましたけどね。

## 5. おわりに

本研究は、幼少期に中国と日本を移動した若者を対象に、移動の各段階で、アイデンティティ交渉の実践にどのような変化があるのかを明らかにすることを目的とした。5名の協力者へのインタビューを分析した結果、(a)直線的で単純な方略から曲線的で複雑な方略への変化；(b)移動経験のある国への依存から、特定の国や移動経験に依らないアイデンティティ交渉への変化；(c)受け身的な方略から能動的で戦略的なアイデンティティ交渉への変化、という3つの特徴があることを明らかにした。

研究の意義として、先行研究が不十分であった「中国に生まれ、幼少期に日本で数年間滞在した後中国に戻った」移動を研究対象とすることで、他の経路と同様に、若者たちのアイデンティティの複雑さや戦略的な交渉を明らかにしたことが挙げられる。加えて、移動した国同士の関係が、アイデンティティ交渉の過程で作用していることを示した。さらに、「年齢」を分析の軸に置いたことで、幼少期から成人後のアイデンティティ交渉の方略の変化を提示することができた。今後は、採用した研究方法である「オープン・コーディング」の特徴を活かし、協力者間でアイデンティティ交渉にどのような類似性や相違点があるのかや、その要因について分析を進めていきたい。

### 参考文献

- Kanno, Yasuko (2003). *Negotiating Bilingual and Bicultural Identities: Japanese Returnees betwixt Two Worlds*. New York: Routledge.
- 川上郁雄(2018). 「移動する子ども」からモバイル・ライブズを考える. 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編). 移動とことば. pp.245-271. くろしお出版.
- 川上郁雄(2021). 「移動する子ども」学. くろしお出版.
- 小林聡子(2021). 国際移動の教育言語人類学: トランスナショナルな在米「日本人」高校生のアイデンティティ. 明石書店.
- Norton, Bonny (2013). *Identity and Language Learning: Extending the Conversation* (2nd.Ed). Bristol: Multilingual Matters.
- 佐藤郁哉(2008). 質的データ分析法—原理・方法・実践—. 新曜社.
- サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実(編)(2019). 質的研究法マッピング—特徴をつかみ、活用するために—. 新曜社.
- 藤越(2022). 幼少期に中国と日本を往還した若者のアイデンティティの共通点と多様性—アイデンティティ葛藤とその解決方略に焦点を当てて—, 第46回社会言語科学会研究大会予稿集. pp.6-9, 社会言語科学会.
- Weedon, Chris (2004). *Identity and Culture: Narratives of Difference and Belonging*. Maidenhead: McGraw-Hill Education.
- Zhu, Hua (2017). New Orientations to identities in Mobility. In S. Canagarajah (Ed.), *Routledge Handbook of Migration and Language*. London: Routledge, pp.117-132.